

9月18日に米川哲夫先生が亡くなられたと聞いて、悲しく思うとともに、一つの時代が終わったという感慨を覚えた。先生は一九二五年（大正十四年）一月のお生まれで、95歳。安らかな大往生であったことを願うばかりである。昭和の時代が始まる直前に生まれた米川先生は、昭和の時代の動乱のすべてを生き抜き、平成を経て、世の中が令和に替わるところまで見届けて亡くなった。

米川哲夫先生は1963年に東京大学教養学部助教授となり、以後教授として1985年までロシア語・ロシア史を教えた。1985年に東大を定年退職後は、東京国際大学で教鞭を執り続けるかたわら、1988年から5年間、日本ロシア文学会の会長を務めた。いつも折り目正しく、謹厳実直、何事につけ冷静に淡々と対応する米川先生は、日本におけるロシア語ロシア文学研究の看板として大きな存在感があった。米川先生のご専門はロシア文学ではなく、ロシア史、それも19世紀の農奴制を中心とした社会史であったが、当時のロシア文学会は歴史も語学文学も乗り入れ合う、ゆとりのある古き良き時代であった。改めて言うまでもないが、米川哲夫先生の父君は、明治以来の日本におけるロシア文学研究・翻訳でもっとも大きな役割を果たしたロシア文学者の一人、米川正夫である（以下非礼を承知で、歴史的人物については敬称を省略する）。ちなみに米川正夫は1962年から4年間、やはり日本ロシア文学会会長を務めているので、親子二代で会長として日本ロシア文学会の発展に尽力されたことになる（その他に親子二代で会長を務めたのは、原久一郎・卓也だけである）。

ロシア史を専門とする哲夫先生の業績について、私は云々できる立場ではないが、おこがましくもここに追悼の言葉を記させていただくことにしたのは、先生の訾咳に接する機会がしばしばあったので、自分の記憶の中に生きている先生の姿を次世代に伝えておくことに多少の意味はあるだろうと考えてのことである。

ロシア史に関して私はまったくできの悪い学生で、先生はソ連留学の成果を生かした農奴制史に関する綿密な講義をされていたと思うが、バルシチナとかオブロークといった単語が学部生時代の私の頭に焼き付いたのは先生の学恩だとはいうものの、それ以上ロシア史関係のことは誠に情けないことにほとんど何も覚えていない。ただし、何度かにわたって取った先生の授業のうち、プーシキンを扱ったものがあって（学部の授業ではなく、すでに大学院に入ってからのことだと思う）、私はプーシキンの批評論についてレポートを書いたことがある。いまから考えてみると、先生の授業から刺激を受けながらプーシキンについて考える機会を与えられたことは――19世紀のロシアの歴史と文化について幅広い知見をお持ちの先生のもとで何でも書いて指導していただけたという安心感があり――その後の自分の道にとって予想外に重要な経験だった。ちなみに、私の妻、沼野恭子は、東京外国語大学で、非常勤講師として出講されていた哲夫先生の講義に出席しており、いまでも懐かしく

先生の端正な講義の様子を思い出している。米川先生の息女、共子さんは芸大を出て声楽家となった方だが、じつは私の妻恭子とお茶の水女子大付属小学校の同級生で、「きょうこ」という名前まで同じである。これもご縁というべきだろうか

私が東京大学教養学部(駒場)のロシア語講師として採用されたのは1985年のことだが、じつはそれは、定年(当時は60歳)で東大を辞められた米川先生の後任人事だった。だから東大駒場のロシア語教室では先生とは入れ違いとなり、同僚であったことはないのだが、先生とはその後も学会理事会や東京大学教養学部のロシア語教室の懇親会の席などで身近に接する機会は続いた。記憶に残っているのは、いつも姿勢正しく、決して声を荒げたり興奮したりすることなく、大学では丁寧に淡々と講義をし、学会では悠然と采配を振るう姿である。ちなみに、ロシア語教室の懇親会は、渋谷の「ひなはる」(「雛春」だろうか? どういう漢字なのか今では覚えていない)という(もちろん、とうにない)料理屋で行われ、ここには米川哲夫先生を始め、北垣信行、佐藤純一、吉上昭三、菊地昌典、直野敦、島田陽から、当時はまだ青年のように若かった森安達也、さらには当時助手だった安藤厚といった東大駒場ロシア語教室の先生方が並んだだけでなく、さらに時には本郷、つまり東大文学部からは木村彰一、川端香男里、栗原成郎の諸先生も加わり、そのうえ千野栄一先生まで駆けつけることもあり、なんとも豪華な、綺羅星のごときオールスター勢ぞろいだった。

米川哲夫先生からは個人的な話を伺う機会はあまりなかったのだが、米川正夫が家庭ではどんな父だったか、質問をしたことはある。どんなに酒を飲んで酔って帰ってきても、帰宅するといきなり文机に向かって翻訳を始めたとのことで、なるほど、そうでなければあれだけの翻訳の業績は成し遂げられないだろうと納得したのを覚えている。また大学院に入ってからのことだが、哲夫先生の弟にあたるポーランド文学者、米川和夫先生のところ、娘さんの家庭教師が必要なのでやってくれないかと哲夫先生から頼まれたことがあり、それがご縁となって和夫先生とも知り合い、当時ロシア文学と並行してポーランド文学、特に詩に関心を持っていた私は和夫先生から直接薫陶を受けることができたのは幸運だった。

しかし、哲夫先生がロシア文学会会長を辞められた後は、お会いする機会もほとんどなく、年賀状のやりとりくらいのお付き合いしかなかった。どこかでたまたまお会いしたとき(先生はもう80歳を超えていたころではないか)、いつまでも矍鑠としている先生に、健康の秘訣は何ですか、と尋ねたところ、「沼野君、ずいぶん太ったね」と心配され、野菜をちゃんと食べているか、と逆に質問された。「いえ、野菜はじつは嫌いでありあまり食べないんです」と答えると、米川先生は真顔で「それなら野菜ジュースでもいいから、飲むといい」と諭された。じつはこの数年来、私自身健康にいろいろと問題を抱えるようになり、野菜ジュースを努めて飲むようにしているのだが、それはあの時の米川先生の言葉によるところが大きい。

こういったとりとめのない断片的な思い出にどれほどの意味があるのか、分からないが、この文章を書くにあたって、自分がいかに少ししか米川先生のことを知らないか、痛感する。教え子は師に対していつもそう思うものだ。もっと聞いておけばよかったと、気が付いたと

きは遅すぎるのだ。急な話で、今さら先生の業績や書かれた文章などを調べる余裕もない。せめてこれくらいはこの機会に確認しておこうと思って、書庫から米川正夫の自伝『鈍・根・才』（河出書房新社、1962年）を引っ張り出して見た。赤裸々な「インチメート」な事柄も含むこの自伝には、じつは息子たちのことはあまり出てこないのだが、それでも以下のような記述が目についた。哲夫先生の生涯を振り返る手がかりとはなると思うので、追悼文としてはいささか変則的だが、そこから抜き書きして拙文を結ぶことにする。ここで正夫は父として息子の運命を一方向的に決めるかのように、「～させた」という言い方を連発しており、いまどきこのような強い父親はあり得ないだろうが、明治生まれの家父長として当時は普通のことだったのではないか。よく読むと、むしろ息子に対する愛情と期待が並々ならないものであったことが推察される。

「年が明けてまもなく（沼野注一昭和20年）、前年東京外語の露語科を卒業した哲夫は召集されて、四国の豊浜にある陸軍舟艇隊へ入ることになった。私たちは哲夫の暁星時代、外語時代の友達を呼んで、心ばかりの歓送会を自宅で開催した。」

「北軽へ帰ってから（沼野注一米川家は戦争末期、北軽井沢の別荘に疎開した）、私は応召して行った哲夫のことが気にかかりはじめた。そろそろ戦地へ向けられる時期になっていたのだ。私は最後の別れのために豊浜へ行く決心をしていた。当時、汽車もしきりに爆撃されていたので、妻は危険を説いてとどめたが、私の決心に変わりなく、その準備をすすめていた。ところが、出発の直前に終戦になったので、私もほっとしたわけである。それから半月ばかりして、哲夫は大きな荷物を背負い、用もない軍刀を正直に腰に吊って、北軽へ帰ってきた。」

「長男の哲夫は、終戦によって軍から解放された翌年（沼野注一1946年。なお、米川正夫には5人の息子がいて、哲夫先生は厳密に言えば三男だが、上の二人は不幸にも早逝しているため、米川正夫は哲夫先生のことを「長男」と呼んでいる）、東大の史学科に入学した。私は月並みに、彼を自分の後継者にしようというつもりで、外語の露語科を卒業させたのだが、当人はロシア史を選んだのである。もっとも、大学卒業後、私の勧めにしたがって、ワシレーフスカヤの『縛められたる大地』（河出書房）などを翻訳したが、その後は断固として文学から離れ、エイドゥスの『日本近代史』といったような仕事に専念しはじめた。」

「和夫をポーランドに送った翌年、長男の哲夫をも外国に留学させることになった。日ソ協会の推薦で、モスクワ大学が日本の留学生を受け入れる、という制度があらたにできたからである。昭和三十四年、私たちは哲夫をモスクワへ送って、ロシア史を勉強させることにした。大学では現代史を専攻するように勧めたが、当人は農奴制を中心とする十八、九世紀を希望して、それに決定したとのことである。」